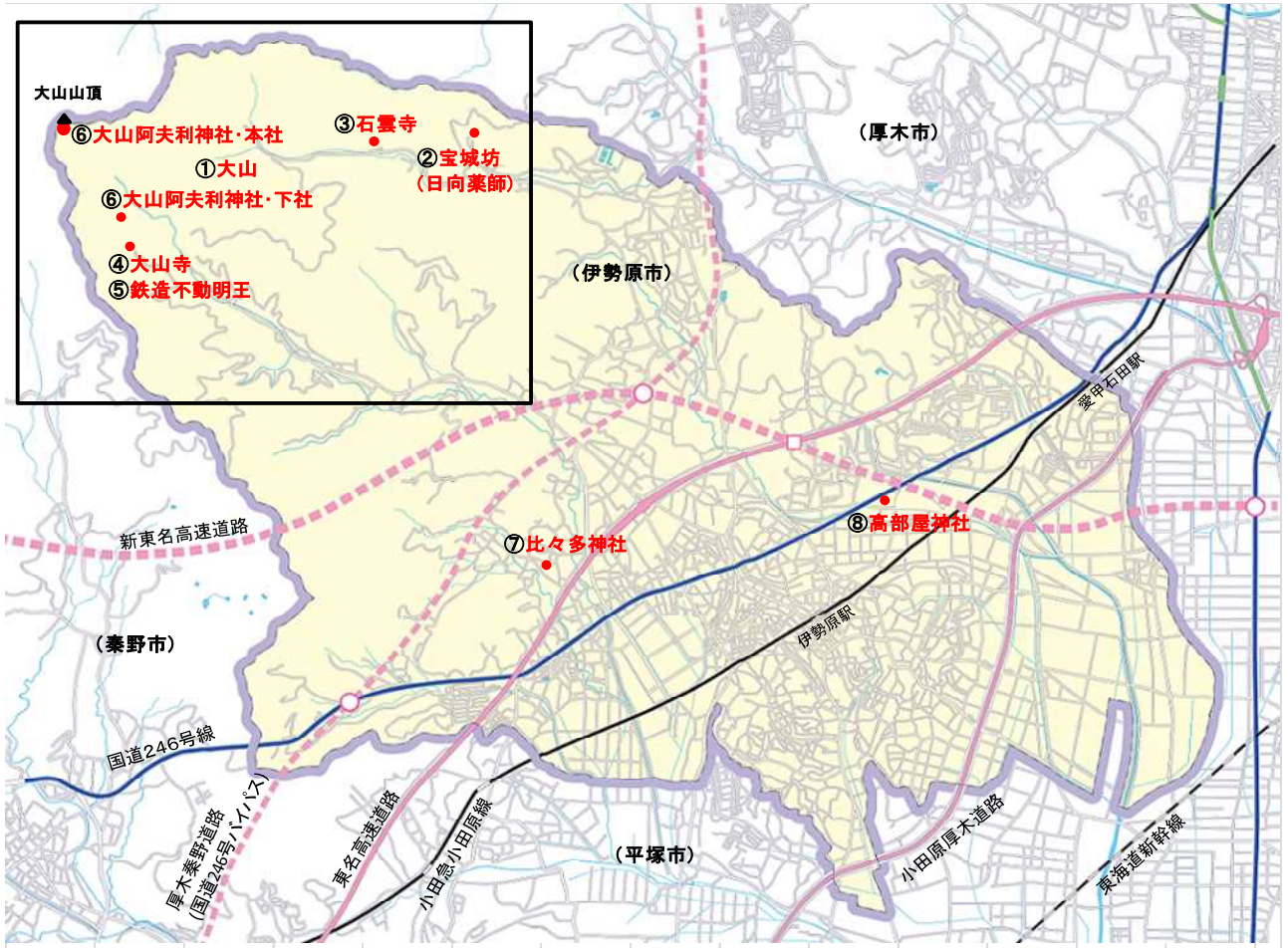


① 申請者	伊勢原市	② タイプ	地域型 / シリアル型 (A) B C D E	
③ タイトル				
江戸庶民の信仰と行楽の地 ～巨大な木太刀を担いで「大山詣り」～				
④ ストーリーの概要（200字程度）				
<p>大山詣りは、鳶などの職人たちが巨大な木太刀^{きただち}を江戸から担いで運び、滝で身を清めてから奉納と山頂を目指すといった、他に例をみない庶民参拝である。そうした姿は歌舞伎や浮世絵にとりあげられ、また手形が不要な小旅行であったことから人々の興味関心を引き起こし、江戸の人口が100万人の頃、年間20万人もの参拝者が訪れた。</p> <p>大山詣りは、今も先導師^{せんどうし}たちにより脈々と引き継がれている。首都近郊に残る豊かな自然とふれあいながら歴史を巡り、山頂から眼下に広がる景色を目にしたとき、大山にあこがれた先人の思いと満足を体感できる。</p>				
⑤ 担当者連絡先				
担当者氏名				
電話		FAX		
E-mail				
所在地				

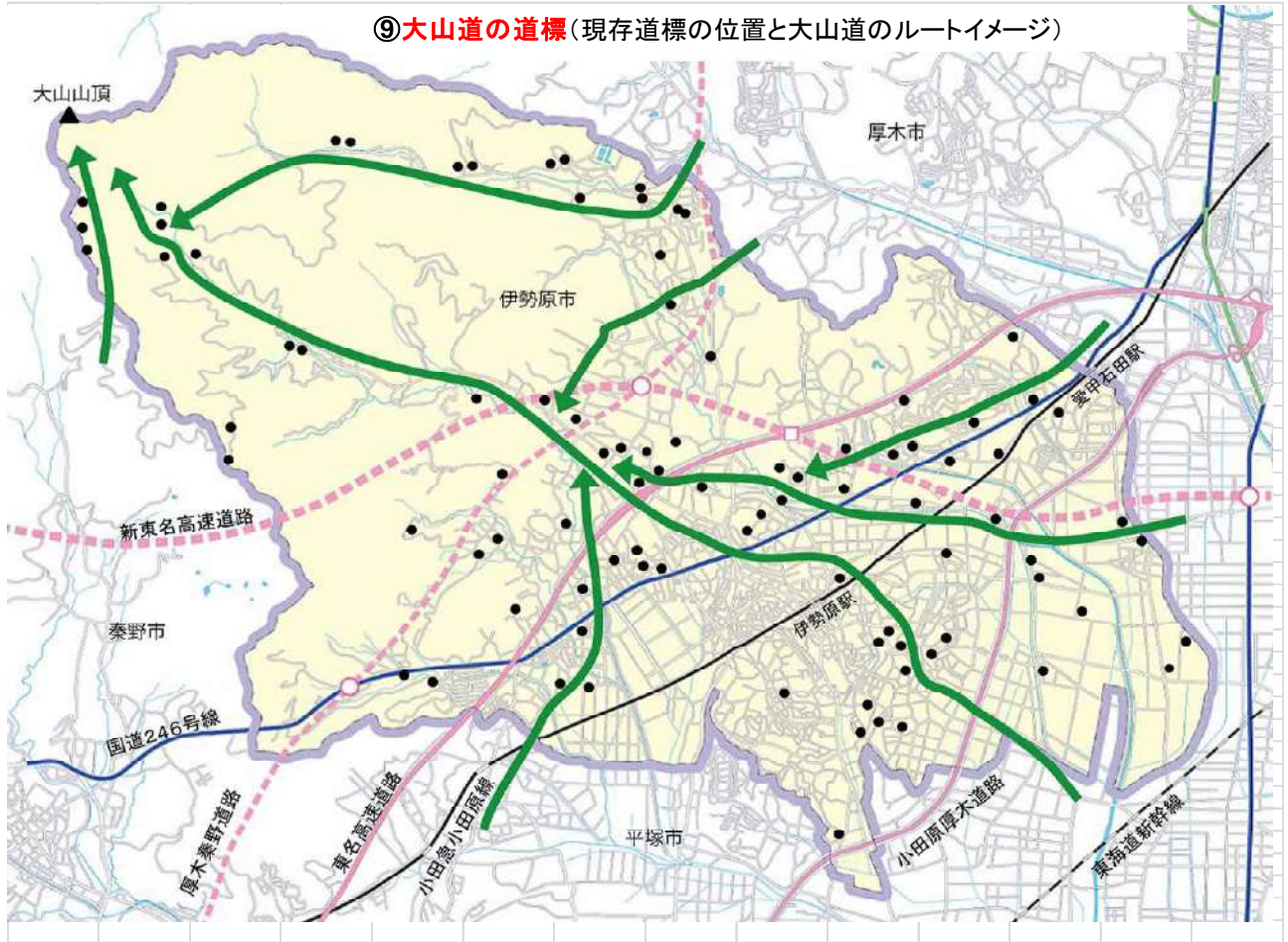
市町村の位置図 (地図等)



構成文化財の位置図 (地図等)



⑨ 大山道の道標 (現存道標の位置と大山道のルートイメージ)



ストーリー

大山への信仰は古く、奈良時代には、^{りょうぜんじ}靈山寺（現・宝城坊。通称・日向薬師）、^{せきうんじ}石雲寺、^{おおやまてら}大山寺が開かれ、平安時代にまとめられた「^{えんぎしきじんみょうちゆう}延喜式神名帳」に記される^{あふり}阿夫利神社や^{ひびた}比々多神社、^{たかべや}高部屋神社の成立などにより、信仰の地としての姿が整えられていった。大山は別名を「雨降山（あめふりやま）」と呼ばれるなど、雨乞い、五穀豊穡、商売繁盛を願う多くの庶民が「^{おおやままい}大山詣り」に訪れた。しかしながら、人々を惹き付けたのは神仏の^{ごりやく}御利益だけではなかった。



1. 大山詣りを仕掛けた御師の生い立ち

戦国時代末期の天正18年(1590年)、豊臣秀吉の軍勢により北条氏が滅ぼされた戦いにおいて、大山の^{しゅげんじや}修験者たちは武装し北条氏と共にいた。その後、江戸近郊に僧兵の武装勢力があることに危機感を持った徳川家康は、大山を純粋な信仰の地とするため山内改革を行い、寺領を寄進し経済的な支援をする一方で、修験者や妻帯している僧侶たちを大山寺から追放した。

家康に下山を命じられた者たちはその信仰心を断ち切らず、生き残り策として中腹で神殿を備えた宿坊を営む御師となった。御師たちは、宿坊や土産物屋を営みながら、年に100日以上にわたり関東一円の檀家を廻って^{おふだ}御札を配り、^{はつぽ}初穂を集め、大山寺に祀られる「不動明王」と山頂に祀られる「^{せきそんたいごんげん}石尊大権現」の靈験を広める地道な布教活動に励んだ。



2. 信仰と行楽を兼ね備えた大山詣り

(1) 庶民の遠出を叶えた大山講

大山は、関東一円どこからもその神秘的な容姿を望むことができ、江戸方面からは富士山とともに眺めることができる。当時、富士詣りも人気があったが、富士へ行くには少なくとも7日を要し、箱根の関所を通る手形が必要な大旅行であった。一方、大山詣りは、関所も通らず、帰りがけに江ノ島や金沢八景を経由しても3日か4日程度といった観光を兼ねた小旅行であった。

しかしながら、いかに江戸から近い大山詣りとはいえ、1人での参拝となると費用の工面は困難であった。そうしたことから、同じ職種の職人同士や今でいう町内会を単位とする大山詣りを目的とした講を組織し、費用をみんなで積立て順番制で大山に向かうといった仕組みを作り上げた。御師たちの熱心な布教もあり、関東一円をはじめ静岡、山梨、長野、新潟、福島に広がり、最盛期には100万戸を超える檀家がいた。

こうして、江戸から距離的に近い利便性と大山の歴史的由緒を生かし、靈験あらたかでありながらも、厳しい修行や戒律を伴わない、気軽な信仰と行楽を兼ね備えたものとして大山詣りはできあがっていった。

(2) 納め太刀を担ぎ「いざ！大山へ」

関東一円から大山へと続く道は「^{おおやまみち}大山道」と呼ばれ、江戸を出立した参拝者たちは相模湾を左手にして、はるか向こうの富士山が背後に見える大山を目ざし、要所にたてられた石造りの^{どうひょう}道標をたどりながら楽しげに歩を進めた。大山講の一行、いわゆる^{こうじゅう}講中が江戸から肩に担いで運んだ巨大な木太刀は、源頼朝が武運長久を祈願して自分の刀を大山寺に奉納したとされることに由来し、参拝に際して奉納する納め太刀である。庶民による参拝では他に例をみない、唯一大山詣りで行われたものである。



幅広い人々に親しまれた大山であったが、日頃高い所での仕事が多く、遠くに見える大山に特別な感情を抱いていた鳶や大工、火消しといった職人たちでつくる講も多くあった。こうした職人たちは水や石への縁起を担ぎ、「雨降山(あめふりやま)」の名や山頂の「石尊大権現」にあやかかって御利益を求め参拝に訪れ、粹にこだわりを持つ講中同士が競い合ううちに納め太刀も徐々に大きくなり、7メートルに及ぶものも奉納されている。また、参拝者の中には、ばくちに負けて借金取りから逃げないように大山詣りをした者もいた。納め太刀には、五穀豊穰、商売繁盛などの願いとともに庶民の武運長久とも言える勝負運を上げる意味も込められていた。

(3) 歌舞伎や浮世絵の題材となった大山詣り

参拝者たちは中腹にある滝に打たれ身を清める滝垢離たきごりをしてから登拝する。粹な職人たちにとっての滝垢離は、互いに彫りものを披露し合う大山詣りならではの舞台でもあった。こうした姿をはじめとして大山詣りに多くの人々が関心を寄せていたことから、歌舞伎や浄瑠璃、落語、川柳などに取り上げられ、また、参拝者たちが大山に向かう道中の様子や、歌舞伎役者がふんずける彫りもの姿で大きな納め太刀を手にして滝に打たれる姿などを描いた浮世絵が売り出されたこともあり、更に多くの人々の興味や関心を呼び起こし、江戸の人口が100万人であった頃、年間20万人もの参拝者が大山を訪れている。



(4) 参拝客をもてなす宿坊と麓の繁栄

参拝の講中を歓待する宿坊は、講の所在地とその名称が刻まれた玉垣たまがきに囲まれ、玄関先に並ぶ登拝記念の石碑や奉納された手水鉢ちようずばち、講の名を刻み込んだ板まねきや布に染め抜いた布まねきが御師とのつながりの強さを表し、帰宅した家族さながら講中を出迎える。

御師たちは、参拝客の宿泊から登拝の道案内まで一切の世話をし、宿坊に備える阿夫利神社の分霊を祀る神殿で、登拝する講中の無事を祈願した。



大山の名物となっている豆腐料理は、各地の講から奉納された大豆を利用し地元の清水でつくったのが始まりで、宿坊ごとにそれぞれの講から預かる専用の器を用いて振る舞われた。また、地域の木地師きじしにより作られた大山こまは、金回りが良くなるという縁起物で、参拝客が帰宅の際に買い求め、誰からも喜ばれることから、御師も檀家廻りの際に土産代わりに持参していた。

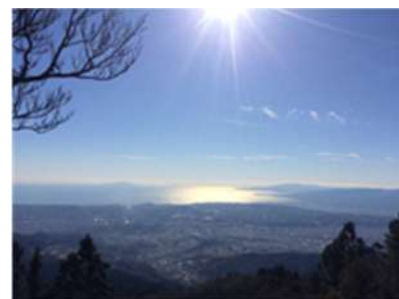
大山の麓も大山詣りの恩恵にあずかり、往来する参拝者を相手とする商いはもとより、宿坊で必要となる布団や履物から日用品、酒や食料品などの取引で繁盛した。

3. 今に息づく庶民信仰と神秘的な魅力

大山詣りは先導師せんどうし(当地では明治の神仏分離を契機に御師を改称)により脈々と引き継がれ、今も先導師の道案内で登拝する白装束に身を包んだ大山講の一行や古くから伝わる様々な祭事を目の当たりにすることができる。

宿坊や参道沿いに軒を連ねる茶店や土産物店では、当時の風情を感じることができ、もともと精進料理であった豆腐料理や猪、山菜といった地元の食材を使った食事を楽しむ。

首都近郊に残る豊かな自然とふれあいながら歴史を巡り、山頂から眼下に広がる雄大な景色を目にしたとき、大山にあこがれた先人たちの思いと満足を体感できる。



ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の所在地
①	おおやま 大山	未指定 (名勝)	<p>都心から約 50km、神奈川県西部、丹沢山地の東麓に位置する標高 1,252m の山。以東には筑波山まで高い山がないことから、関東一円から山容を望むことができる。</p> <p>古くから山岳信仰の地として崇められ、山頂からは約 5,000 年前の縄文土器や古墳時代の土器、祭儀に用いられたと思われる平安時代の鏡などが発見されている。</p>	
②	りょうぜんじ 靈山寺 ほうじょうぼう (現・宝城坊) ひなたやくし 通称・日向薬師	国重文 (建造物) ほか	<p>霊亀 2 (西暦 716) 年に行基により創建されたと伝わる寺。神仏分離を契機に宝城坊となる。</p> <p>暦応 3 (西暦 1340) 年鑄造の銅鐘(国重文・工芸品)には、初代の鐘が天曆 6 (西暦 952) 年に村上天皇の発願によって造られたことが記されており、厨子(国重文・建造物)に納められている本尊の鉦彫薬師三尊像(国重文・彫刻)も同時期の作とされる。平安時代末から鎌倉時代にかけての作とされる木造薬師如来坐像(国重文・彫刻)、木造日光・月光菩薩立像(国重文・彫刻)、木造阿弥陀如来坐像(国重文・彫刻)、木造四天王立像(国重文・彫刻)などの仏像も祀られている。</p> <p>当寺には、源頼朝や妻の北条政子も参拝しており、直径約 1.4m の大太鼓(県有形民俗)は頼朝の奉納と伝えられている。</p>	
③	せきうんじ 石雲寺	市指定 (古文書) ほか	<p>寺伝により養老 2 (西暦 718) 年の開創と伝わる寺。</p> <p>雨降山の山号をもつ元華嚴宗の寺院で、壬申の乱で敗れた大友皇子を祀る。</p>	
④	おおやまでら 大山寺	未指定 (建造物) ほか	<p>大山詣りで納め太刀を奉納した寺。</p> <p>天平勝宝 7 (西暦 755) 年に奈良東大寺の長官であった良弁僧正が、聖武天皇の命により開創したとされ、平安時代末の木造不動明王坐像(県重文・彫刻)を祀り、鎌倉時代作の鉄造不動明王像(国重文・彫刻)を本尊とする。</p> <p>明治の神仏分離までは現在の大山阿夫利神社の下社がある位置にあり、江戸時代には徳川家康、家光ら幕府の後ろ盾により、本堂をはじめとする大規模な建物群が造営されていた。</p> <p>明治の神仏分離により廃寺となるが、熱心な信者の力により明治時代中頃に本堂が現在の地に再建され、当時は明王寺と称していたが、大正時代になって大山寺として再興された。</p>	

⑤	てつぞうふどうみょうおう 鉄造不動明王 に どうじぞう 及び二童子像	国重文 (彫刻)	大山寺の本尊であるこの不動明王への参拝が大山詣りの目的のひとつであった。 鎌倉時代に願行上人により造られたとされる鉄仏で、荒々しい力強さが多くの信仰を集めた。	
⑥	あふりじんじゃ 阿夫利神社 おおやまあふり (現・大山阿夫利 じんじゃ 神社)	未指定 (建造物)	山頂に石尊大権現を祀る延喜式神名帳に掲載されている神社で、大山寺とともに、大山詣りの目的地のひとつであった。 長く神仏混淆の状況が続いたが、明治政府の神仏分離政策により大山寺が廃されると、大山寺の不動堂(本堂)跡地に阿夫利神社の下社が建立され、山頂には本社が建てられた。	
⑦	ひびたじんじゃ 比々多神社	県指定 (工芸)ほか	持統 5 (西暦 691)年に相模国の国司がこま犬(市指定)を奉獻したとの伝承があり、相模地域屈指の副葬品を有する古墳に囲まれるように建つ延喜式神名帳に掲載されている神社。	
⑧	たかべやじんじゃ 高部屋神社	国登録 (建造物)ほか	延喜式神名帳に掲載されている神社で、平安時代に大山一帯を含む糟屋荘を支配した、糟屋氏のゆかりと伝えられている。	
⑨	おおやまみち どうひょう 大山道の道標	市登録 (有形民俗)	各地からの参詣者を大山へと導いた石造りの道標。側面には「大山道」と彫り込まれ、大山にちなんで不動明王を載せているものもある。 大山へと向かう道は、柏尾通り大山道、田村通り大山道など、主要なものだけでも 8~10 のルートがあったとされる。現在も、市内には多くの道標が残されている。	
⑩	おさ だち 納め太刀	未指定 (有形民俗)	大山詣りに講中が江戸から担いでくる木太刀。源頼朝が武運長久を祈願して自分の刀を大山寺に奉納したとされることに由来し、この木太刀に願いを書き、大山寺や山頂の石尊大権現に奉納した。 木太刀は当初 30 cmほどであったが、中には 7m を超えるものも納められるようになった。	
⑪	もとだき 元滝	未指定 (名勝)	大山詣りでは、大山山内に数箇所ある滝で滝垢離を行い、身を清めた後に登拝することがならわしであった。 現在も、当時、滝垢離で使われた滝が残されている。	
⑫	ろうべんだき 良弁滝	未指定 (名勝)		
⑬	あたごだき 愛宕滝	未指定 (名勝)		
⑭	おおたき 大滝	未指定 (名勝)		

⑮	<p>おおやま 大山や大山詣り の様子を描かれた 「浮世絵」 (伊勢原市教育委 員会所蔵)</p>	未指定 (絵画)	<p>○歌川広重^{うたがわひろしげ}「五十三次名所図会七南期(湖)左り不二」安政2(西暦1855)年 =東海道から見える富士山と大山が描かれている。</p> <p>○前北斎^{ぜんほくさい}為一^{いっ}(葛飾北斎^{かつしかほくさい})「諸国瀧廻り 相州大山ろべんの瀧」文政末頃 =良弁滝での滝垢離の様子が描かれている。</p> <p>○五雲亭^{ごうんてい}貞秀^{いさだひで}「相模国大隅郡大山寺雨降神社真景」安政5(西暦1858)年 =大山の入口から山頂石尊社までの大山寺境内地と、さらに富士山、高尾山、江ノ島、伊豆半島など、大山から見える名所を描いている。</p> <p>○五雲亭^{ごうんてい}貞秀^{いさだひで}「大山良弁図」元治元(西暦1864)年 =参詣者の滝垢離でにぎわう良弁滝の様子が描かれている。</p> <p>○歌川芳虎^{うたがわよしとら}「大山石尊大権現(仮題)」文久2(西暦1862)年 =大山を背景に、中央に鈴を持った歌舞伎役者の中村芝翫、右に提灯を掲げた坂東彦三郎、左に「石尊大権現」と朱文字で書かれた木太刀を持つ河原崎権十郎^{くわんじゅうら}が描かれている。</p> <p>○歌川豊国^{うたがわよとくに}「大當大願成就有が瀧壺」文久3(1863)年 =「奉納大山石尊大権現 大天狗 小天狗 天下泰平 国土安穩講中安全」と書かれた大きな木太刀を持つ男など、7人の役者がふんする粋な参拝者が滝垢離する姿を描いている。</p> <p>○豊原国周^{とよはらくにちか}「見立水滸傳當瀧壺」慶応3(西暦1867)年 =歌舞伎役者の市川団十郎が滝を背景に諸肌脱いで、納め太刀を持った姿が描かれている。</p> <p>ほか</p>	
⑯	<p>参道沿いに建てら れた宿坊^{しゆくぼう}</p>	未指定 (建造物)	<p>大山講中を宿泊させた宿屋で、御師(現在の先導師)の自宅を兼ね、屋内に阿夫利神社の分霊を祀る神殿が設けられているのが特徴である。</p> <p>宿坊は、大山の参道沿いに今も残り、現在まで脈々と引き継がれている大山講の講中の宿泊はもとより、一般の来訪者にも宿や食事を提供している。</p>	
⑰	<p>大山とうふ(豆腐料理)</p>	未指定 (無形民俗)	<p>各地の大山講中から寄進された大豆を利用し、大山の清水で作った大山とうふの料理が参拝客に振る舞われた。</p> <p>もともとは精進料理であったが、現在では現代風な調理を取り入れた地元の名物として定着し、来訪者に提供されている。</p>	

⑱	大山こま	国選択 (無形民俗) ほか	金回りが良くなるという縁起物で、大山の木地師により製作された大山土産のひとつ。現在も大山の代表的な土産物である。	
⑲	ほうじょうぼう 宝城坊(日向薬 師)の「神木のぼり」	市登録 (無形民俗)	修験者が修行のための入山前後に行う儀式で、現在も宝城坊の春の例大祭において再現されている。 修験者たちが斧や弓で周囲を清めた後、5mほどのシイの木に登って安全祈願の書状を読みあげる。木から降りると護摩を焚き、火渡りが行われる。	
⑳	おおやまあふりじんじゃ 大山阿夫利神社 の倭舞・巫子舞	県指定 (無形民俗)	奈良春日大社伝承の舞で、現在も大山阿夫利神社の秋季例大祭などで奉納される。	
㉑	おおやまあふりじんじゃ 大山阿夫利神社 の大山能狂言	市指定 (無形民俗)	大山に江戸時代から伝わる伝統芸能で、300年を超える今も大山能楽社保存会により引き継がれ、大山阿夫利神社の秋季例大祭などで奉納される。	

構成文化財の写真一覧

①大山



②霊山寺(現・宝城坊)



②霊山寺(現・宝城坊の木造薬師如来両脇侍像)



②霊山寺(現・宝城坊の厨子)



③石雲寺



④大山寺



⑤大山寺(鉄造不動明王及び二童子像)



⑥阿夫利神社(現・大山阿夫利神社・下社)



⑥阿夫利神社(現・大山阿夫利神社・本社)



⑦比々多神社



⑧高部屋神社



⑨大山道の道標



⑩納め太刀



⑩納め太刀



⑪元滝



⑫良弁滝



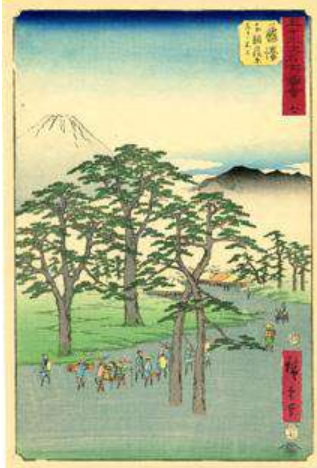
⑬愛宕滝



⑭大滝



うたがわひろしげ
⑮浮世絵：歌川広重「五十三次名所図会
七南期(湖)左り不二」 安政 2(1855)年



ぜんほくさいいつ かつしかほくさい
⑮浮世絵：前北斎為一(葛飾北斎)「諸国瀧
廻り 相州大山ろうべんの瀧」 文政末頃



ごうんていさだひで
⑮浮世絵：五雲亭貞秀「相模国大隅郡大山寺雨降神社真景」 安政 5(1858)年



ごうんていさだひで
⑮浮世絵：五雲亭貞秀「大山良弁図」 元治元(1864)年



うたがわよしとら
⑮浮世絵：歌川芳虎「大山石尊大権現(仮題)」文久2(1862)年



うたがわとよくに
⑮浮世絵：歌川豊国「大當大願成就有が瀧壺」文久3(1863)年



とよはらくにちか
⑮浮世絵：豊原国周「見立水滸傳
當瀧壺」慶応3(1867)年



⑯参道沿いに建てられた宿坊



⑩宿坊(玉垣)



⑩宿坊(板まねき)



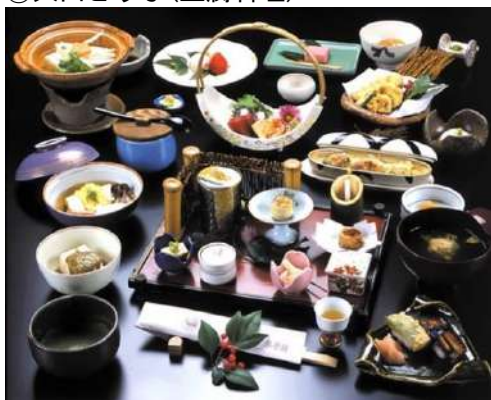
⑩宿坊(布まねき)



⑩宿坊(神殿)



⑪大山とうふ(豆腐料理)



⑱大山こま



⑱宝城坊(日向薬師)の「^{しぎ}神木のぼり」



⑳大山阿夫利神社の「^{やまとまい}倭舞」



㉑大山阿夫利神社の「^{みこまい}巫子舞」



㉒大山阿夫利神社の「大山能狂言」



(注) 写真は「能」

㉓大山阿夫利神社の「大山能狂言」



(注) 写真は「狂言」

日本遺産を通じた地域活性化計画

認定番号	日本遺産のタイトル
24	江戸庶民の信仰と行楽の地～巨大な木太刀を担いで「大山詣り」～

(1) 将来像 (ビジョン)

本日本遺産事業は、平成29年度に策定した伊勢原市第5次総合計画後期基本計画（平成30年度～令和4年度）において、「日本遺産大山詣りを活用した誘客促進」と位置付け、観光施策に取り組んできました。また、令和3年に作成し、文化庁長官の認定を受けた伊勢原市文化財保存活用地域計画（令和3年度から令和9年度）にも、日本遺産に関わる取組を位置付けました。同計画では、本市の歴史文化の特徴を捉え直し、いくつかのテーマ別の文化財群を設定した上で、日本遺産「大山詣り」を本市の歴史文化を代表するストーリーとしつつ、他の文化財群との関連付けによる発展的な可能性についても示しました。本市の文化財保護の目指す方向性を「歴史文化の適切な継承とまちづくりへの活用」と定め、文化財の「調査」「保存」「活用」「人材育成」の全てに関わる重要な取組として、日本遺産に関する取組を列記しています。本市にとって日本遺産は、「歴史文化を観光事業にいかし、地域活性化へつなげていくために重要であり、これを土台にしてより多角的な事業展開へ結びつけていく」としています。

この様な行政の中長期計画への位置付けに基づき、文化財の保存と活用を「信仰と行楽」として、地域における文化財の継承と賑わいの創出に向けて事業を進めていきます。

既に「信仰と行楽」の素地を持つ大山地区は、構成文化財である「宿坊」をいかした宿坊体験型教育旅行で造成した「大山詣り体験」をはじめとした各種体験の取組を進め、文化財を活用した着実な来訪者の増加を図るとともに、地域資源の更なる磨き上げと受入れ環境整備を進めていきます。また、「信仰」の観点から多くの要素をもつ「比々多地区」「日向地区」の構成文化財では、新たにサブストーリーの造成を進め、「行楽」の要素となる体験コンテンツを各エリアで造成して、大山地区を含めた周遊の仕組み作りにより、「信仰と行楽の地」を目指します。

構成文化財においては、これまでの活用による文化財への影響などを検証しつつ、活用による効果を市民や地元の事業者へ発信することで、構成文化財の経済的な価値の再認識を図り、文化財の地域への経済効果と市民のシビックプライドが、各構成文化財の保存活動に繋がり、文化財の保存と活用が循環した姿を「信仰と行楽」の地で、具現化することを目指します。

(2) 地域活性化計画における目標

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること

指標①-A：体験コンテンツの体験者数

年度	実績			目標		
	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
数値	164人	875人	736人	1000人	1500人	2000人
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	大山地区4件と比々多地区1件の体験コンテンツ体験者数を実績とし、新規コンテンツも含めての体験者数を指標とする。					

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること

指標①-B：インバウンド来訪者数の推移

年度	実績			目標		
	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
数値	1,424名	コロナで中止	コロナで中止	300名	500名	700名
目標値の設定の考え方及び把握方法	多客期の大山インフォメーションセンターでの外国人観光客の案内人数を指標とし、コロナ前の半分まで回復を目指す。					

目標②：地域において日本遺産のストーリーが誇りに思われること

指標②-A：シティプロモーション推奨度アンケートの日本遺産に対する回答

年度	実績			目標		
	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
数値	14%	17%	集計中	23%	25%	25%
目標値の設定の考え方及び把握方法	市内在住者を対象とした「伊勢原に住んでよかったと思うところ」の複数回答の「日本遺産のまちに選ばれた」割合を指標とし、回答者の25%に達する数を目指す。					

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③－A：宿坊体験型教育旅行の地元経済への効果						
年度	実績			目標		
	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
数値	0万円	274万円	260万円	383万円	479万円	575万円
目標値の設定の考え方 及び把握方法	教育旅行の地元への経済効果を指標とし、学校数（1校100名想定）が増加することを目指す。 ※平均単価 9591円×100人ずつの増加率					

目標④：日本遺産のストーリー・構成文化財の持続的な保存・活用が行われること						
指標④－A：販売収入1%還元制度を活用した文化財の保護周知件数						
年度	実績			目標		
	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
数値	0件	0件	1件	2件	3件	4件
目標値の設定の考え方 及び把握方法	販売収入1%還元制度を活用した保護周知件数の合計件数を指標とし、毎年1件ずつ実施することを目指す。					

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤－A：伊勢原市への入込み客数						
年度	実績			目標		
	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年
数値	199万人	133万人	集計中	186万人	195万人	200万人
目標値の設定の考え方 及び把握方法	伊勢原市への入込観光客数を指標とし、コロナ前の約200万人に3年間で回復することを目指す。					

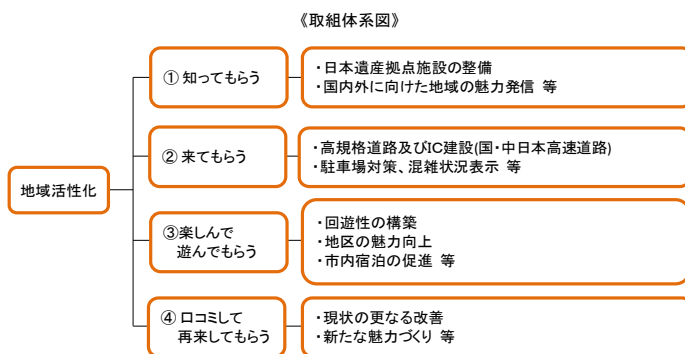
(3) 地域活性化のための取組の概要

1 成果と課題整理

これまでの取組では、図1で示した取組体系を基本として、日本遺産のブランドをいかしたまちづくりを、当初より観光への意識の高い「大山地区」をフックとして進めてきました。特に、①、②にあたる文化資源のPR物品の作成や観光案内看板の設置など観光資源化に向けた取組を進め、市の日本遺産担当部署を観光部門に移行するなど、「観光資源」としての文化財の価値を所有者及び市民に根付かせる意識醸成に取組んできた成果が出ています。また、③にあたる構成文化財を活用した各種体験コンテンツをパッケージとした「宿坊体験型教育旅行」の制度を日本遺産認定時から企画立案を行い、平成30年(2019年)から実際に事業化し、日本遺産のストーリーを活用した新商品開発と合わせて、本日本遺産の軸となる2つの事業を確立し推進してきました。これにより、図1の4つのサイクルの中でも、主に①～③の取組を中心にして成果を得られています。また、構成文化財においては、来訪者の増加に合わせて、安全性や利便性を向上するための参道整備や手すりなどの導線を中心とした整備を日本遺産協議会と連携して進めています。

一方で、事業の後半にあたる令和2年(2021年)及び令和3年(2022年)は、コロナ禍での事業実施となったことから、十分な実績確認やフォローアップを実施することが出来なかったこともあり、④は喫緊の課題であると認識しています。また、大きく3エリアで魅力的な構成文化財を抱えている本日本遺産では、回遊性の向上に向けて各地区の魅力のアップに取り組んできましたが、地区同士を繋ぐ交通アクセスの課題や日帰り観光が多いことなどから、十分な効果を発揮できておらず、今後の課題として認識しています。

図1



2 取組の柱について

今後の3年間の取組としては、現在進めている「宿坊体験型教育旅行」、「うまいものセレクトブランドの推進」及び「伊勢原歴史アドバイザー養成」の3つの事業を柱にしつつ継続した観光客等受入れ環境整備を進めていきます。

(1) 文化財を次世代に繋ぐ体験事業

宿坊体験型教育旅行を全国の中学校を中心として誘致し、これまで構築してきた日本遺産ストーリーを体験できる仕組みのを継続していきます。当初からターゲットとしている東北地方、東海地方への誘致活動を進めると共に、実績のある県内の事例を基にフォローアップを行い、受入れ環境を強化します。また、サブストーリーの造成や体験コンテンツの拡充を進め、市内の学校におけるシビックプライドの

醸成への活用やワーケーション・MICE への応用を進めると共に、各団体が行っている宿坊の浄書体験やとうふ作り体験などの一般向けの体験がより手軽に行える仕組み作りを目指します。これにより、文化財所有者や観光事業者を活性化させるとともに、体験者の心に残る体験を広げることで、今後自主的に旅に出るときの再来訪に繋げる長期的なりピーター創出施策として進めていきます。

(2) 「うまいものブランド」を活用した新商品開発事業及び販売収入文化財還元制度
観光客に土産で日本遺産のストーリーや伊勢原らしさを伝えることを目的に創設した「日本遺産のまち いせはらうまいものセレクト」のブランド強化を進めます。

本来、大山詣りは講の代表者による代参を基本としており、参拝者が土産物を地元を持ち帰り講員にも配ったとされています。またそのために御師は大山独特の土産を用意していました。これらの背景をストーリーの一つとして、本日本遺産らしさや各構成文化財の要素を生かした新商品を開発する「いせはらうまいもの遺産創造委員会」では地元事業者が地域プロデューサーとなり、継続的に新商品の開発を実施し、うまいものセレクトへの認定と販売収入文化財還元制度の対象となる商品の拡充に取り組めます。

(3) 歴史観光案内人材育成事業

いせはら歴史アドバイザー養成講座を継続して実施することで、日本遺産の魅力を次世代に伝える人材を育成します。また、インバウンド観光客の回復を見越して、「大山地域通訳案内士制度」により、日本遺産を多言語で案内できる人材を創出しつつ、観光事業者や民間事業者と案内人材をマッチングする仕組みを検討し、育成人材が活躍できる場の創出を目指します。

合わせて、日本遺産の構成文化財の継承を図るため、親子や中学生を対象とした体験教室を開催し、「大山能」や「倭舞・巫子舞」といった無形民俗文化財の後継者育成を図ります。

(4) 観光客受入れ環境整備

文化資源の PR や観光案内の設置などを継続して検証、実施していくとともに、各構成文化財所有者において文化財の活用上課題となっている点など調査し、受入れ環境の整備を進めていきます。

また、大山バイパスや新東名高速道路の延伸など、自家用車の利用などが増え、回遊性が向上することも想定される一方で、駐車場の問題なども喫緊の課題として認識していることから、パークアンドライドの検討などを継続して検討していきます。

(4) 実施体制

日本遺産認定を契機に設置された「伊勢原市日本遺産協議会」を中心として、その構成員はもとより、地域で活動している文化財関連団体、観光事業者、教育機関、民間事業者との連携を密に本日本遺産事業を推進します。

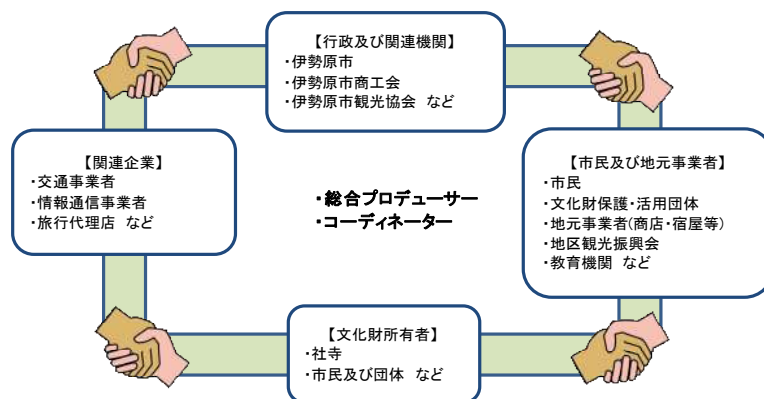
観光事業においては、市内の観光事業者との関わりの強い「伊勢原市観光協会」を中心に、教育旅行事業や旅行事業者と連携した着地型ツアーの企画を行います。また、地元商業者が中心となった「うまいもの遺産創造委員会」では、構成文化財所有者のストーリーを抽出した商品開発を継続して実施していきます。関連事業としては、市内の「公共交通事業者」である小田急電鉄（株）、神奈川中央交通（株）、大山観光電鉄（株）を中心に、観光客の利便性向上のための取組を進めていきます。

他方、文化財保護においては、観光事業へ活用する際に所有者や教育委員会と連携により日本遺産の取組が、文化財へ負担にならないように配慮しつつ、必要な整備を検討します。その費用の一部には、新商品開発で創出された販売収入文化財還元制度により賄うことを目指し、構成文化財所有者のみが負担するのではなく地域で保護と活用が循環する仕組みを目指します。

伊勢原市日本遺産協議会は上記に示した観光事業及び文化財保護の双方の活動について、図2に示すカテゴリを越えた連携のためのコーディネーターの役割を果たし、各団体が実施する事業のPRや事業支援を行政と連携して行っていきます。

図2

《日本遺産を活用した地域活性化推進体制のイメージ》



[人材育成・確保の方針]

うまいもの創造委員会で日本遺産の魅力や地元の魅力を共有することで、新商品開発の主体となるプロデューサーの開拓を進めると共に、市外への教育旅行の誘致や観光PRを通じて、新たな観光事業者や旅行事業者へのアプローチを行い、プロデューサーの創出を目指します。

一方、プレーヤーとして文化財ガイドと観光ガイドへの日本遺産の紹介や地域通訳案内士制度の導入などにより既存のガイドのスキルアップと人材の新規育成を進めます。人材活用においては、それぞれの団体においてガイド受付などを行っており、一般観光客が利用するにはハードルが高いこともあるため、地域通訳案内士制度の導入に合わせて、人材の活用に向けた各窓口の紹介や一元的な予約フォームの構築を目指します。

(5) 日本遺産の取組を行う組織の自立・自走

日本遺産の取組を行う「伊勢原市日本遺産協議会」は日本遺産を活用した継続的な事業展開を図りつつ、観光事業者、構成文化財所有者、民間事業者が直接的な利益を得られる仕組みを作り、各事業の自走化を目指しています。なお、協議会の事務経費については、当面は、市の補助金などを活用して事業を推進し、引き続き取組を進めていきます。

各事業の自走化に向けた具体的な取組検討は次のとおりです。

(1) 教育旅行事業の自走化

既に教育旅行は観光事業者である伊勢原市観光協会により運営されており、伊勢原市日本遺産協議会では誘致のための営業活動を担っています。将来的には、営業活動を収益の中で行うなど、完全な自走化を目指します。

(2) 販売収入文化財還元制度の拡充

うまいものセレクトブランドの認知度拡大や、文化財の周知により本制度の趣旨に賛同する事業者を増やし、文化財の保護・周知に係る費用の捻出を目指します。周知が行き渡ることで、事業者の収入が更に拡大し、それに比例して、文化財保護周知の取組に活用できる寄付金や企業による地域貢献活動の循環を目指します。

(3) 協議会での収益を伴う自主事業を展開

現在は、市の補助金により実施していますが、うまいもの遺産創造委員会の新商品をふるさと納税の対象とするなど間接的に市の財政へ還元するとともに、「納め太刀」(50 cm程度の登拝奉納用)の卸販売や日本遺産紹介サイトへの企業広告掲載など自主事業を展開することで、市の補助金のみではなく、多面的収入源の確保を目指して仕組みを検討します。

(6) 構成文化財の保存と活用の好循環の創出に向けた取組

本日本遺産では、構成文化財の保存と活用の好循環に向けて、次のとおり取組んでいきます。

(1) 販売収入文化財還元制度の活用

日本遺産ブランドを活用した新商品が歴史文化資源の活用であることを念頭におき、販売収入の1%を文化財の保護・周知に還元することで、文化財の持続的な保存と活用を目指します。

(2) アプリ等を活用した文化財の周知と展示方法の検討

文化財の保護の観点から、修理や調査時にデジタルデータの収集を積極的に進め、デジタル博物館やアプリの活用などにより、文化財の展示などによる経年劣化を抑えつつ、観光資源として多角的に活用する方法を検討します。

(7) 地域活性化のために行う事業

(7) - 1 組織整備

(事業番号 1 - A)

事業名	日本遺産を支える団体の組織運営		
概要	文化財保護、観光振興の各団体の事業支援を実施する。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	伊勢原市日本遺産協議会の運営	日本遺産ブランドの総括を行い、地域活性化計画の進捗管理及び新規事業者の開拓や日本遺産の市外へのPRに取り組む。	伊勢原市日本遺産協議会
②	平成大山講プロジェクト推進協議会	「神奈川県第四の核」として大山地域が選定されており、厚木市、秦野市、地元団体、民間事業者と連携して丹沢大山地区の観光地としての整備に取り組む。	平成大山講プロジェクト推進協議会
③	鉄道事業者との連携施策	伊勢原市内の唯一の公共交通事業者である小田急グループと、丹沢大山フリーパスや季節に合わせた誘客施策との連携を進めるとともに、沿線観光地としてのブランド力強化に取り組む。	伊勢原市日本遺産協議会 公共交通事業者
④	民間事業者への活動内容のPR及び参画依頼	うまいもの創造委員会の参加者を増やし新商品の開発力を強化するとともに、日本遺産の取組を通じた事業者向けの売り込みを実施する。	伊勢原市日本遺産協議会 うまいもの遺産創造委員会
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	日本遺産に係る取組への民間事業者の参加団体数		—
2020年			—
2021年			28団体
2022年	民間企業等の参画を増やす		30団体
2023年	民間企業等の参画を増やす		32団体
2024年	民間企業等の参画を増やす		34団体
事業費	2022年： 25万円 2023年： 25万円 2024年： 25万円		
継続に向けた事業設計	各団体で実施される日本遺産事業を魅力あるものとする事で、新規事業者にとって日本遺産事業が収益を生み出すものとして認識されるように、日本遺産の魅力を高めて行く。		

(7) - 2 戦略立案

(事業番号2-A)

事業名	観光と文化財の共生戦略の検討		
概要	日本遺産の新たな魅力の創出事業を実施する。また新規事業の補助金などの検討を行い、新たな魅力の創出に向けた調査検討を行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	観光客等受入れ環境整備に向けた調査及び計画	令和3年までに整備を実施した箇所のフォローアップを行うとともに課題を整理して、新たな整備計画を策定する。	伊勢原市日本遺産協議会
②	旅行事業者や鉄道事業者へのマーケティング	ヒアリングを実施することにより、旅行商品や利用者のニーズを把握し、受入れ環境整備や体験コンテンツの計画に反映する。	伊勢原市日本遺産協議会
③	伊勢原市文化財保存活用地域計画と連携した取組	地域計画内に、日本遺産の取組を位置付けており、他の事業との連携を図りつつ、地域計画を活用した取組の検討を進める。	伊勢原市
④	サブストーリーの構築	各構成文化財のストーリーを再構築して、各構成文化財のサブストーリーの造成に向けた取組を進める。既存の体験コンテンツと合わせて、一元的に予約や紹介の出来る窓口の検討を進める。	伊勢原市日本遺産協議会 構成文化財所有者
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	サブストーリーの体験コンテンツの合計数		3件
2020年			3件
2021年			3件
2022年	サブストーリーの整理		3件
2023年	体験コンテンツ化 1件		4件
2024年	体験コンテンツ化 1件		5件
事業費	2022年：0円 2023年：50万円 2024年：50万円		
継続に向けた事業設計	サブストーリーの再構築を協議会で進め、新たな顧客を対象とする体験コンテンツの造成により継続した事業を推進する。		

(7) - 3 人材育成

(事業番号3-A)

事業名	歴史観光案内人材育成事業		
概要	既存の歴史アドバイザーや観光ボランティアのスキルを高め、国内外の観光客へ日本遺産のストーリーを案内できる人材育成を進める。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	いせはら歴史アドバイザー養成講座	市内の文化財の保存・活用に向けた人材育成のため、2年間講座で文化財調査の基礎知識や伊勢原の歴史、アドバイザーとしての話し方講座等を中心としたカリキュラムを実施し、いせはら歴史解説アドバイザーの認定を行う。	伊勢原市
②	日本遺産ガイド養成講座	いせはら歴史解説アドバイザーのスキルアップ講座を日本遺産の語り部に必要なスキルの取得を目的に実施する。	伊勢原市日本遺産協議会
③	大山地域通訳案内士制度	令和元年に策定した育成等計画を基に大山地域の観光資源の魅力を伝える「大山地域通訳案内士」の育成講座を実施する。	伊勢原市
④	歴史観光案内人材の周知に向けた取組	大山地域通訳案内士の認定に合わせて、日本語案内、英語案内のそれぞれの人材をデータベース化して、関係する旅行代理店などへ情報提供や窓口の一元化の検討を行う。	伊勢原市日本遺産協議会 伊勢原市
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年			制度創設
2020年	大山地域通訳案内士の養成人数		コロナで中止
2021年			コロナで中止
2022年	大山地域通訳案内士の養成数	10名	10名
2023年	大山地域通訳案内士の養成数	10名	20名
2024年	大山地域通訳案内士の養成数	10名	30名
事業費	2022年：700万円 2023年：700万円 2024年：700万円		
継続に向けた事業設計	国内外のガイド人材養成を進め、合わせて着地型ツアーの造成を進めることで、ガイド人材のニーズを高め、人材育成と人材活用の両立を目指す。		

(7) - 4 整備

(事業番号 4 - A)

事業名	日本遺産「大山詣り」観光客等受入れ環境整備		
概要	構成文化財における観光客の受入環境整備について問題点を洗い出し、市域全体での効果的な整備を行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	構成文化財所有者による観光客等受入れ環境整備の取組	令和4年度に調査検討する整備計画を基に、活用できる補助金などを検討し、各構成文化財の参道整備や敷地内の導線整備などの活用に向けた受入れ環境整備を実施する。	伊勢原市日本遺産協議会(構成文化財所有者)
②	市内の観光客等受入れ環境整備の取組	令和4年度に調査検討する整備計画を基に、構成文化財までの導線整備を中心に、案内看板や解説板などの受入れ環境整備を実施する。	伊勢原市
③			
④			
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	環境整備を行った構成文化財の計画数		4 施設
2020年			3 施設
2021年			5 施設
2022年	フォローアップ・新規ニーズの調査検討		調査・計画
2023年	事業実施		3 施設
2024年	事業実施		3 施設
事業費	2022年： 0万円 2023年： 300万円 2024年：300万円		
継続に向けた事業設計	これまでの整備のフォローアップとして来訪者のニーズの調査検討を進め、構成文化財所有者や市で効率的な整備を補助金なども活用して進める。また所有者が不明瞭な構成文化財などは、販売収入文化財還元制度を活用して、文化財の保存整備に繋げていく。		

(7) - 5 観光事業化

(事業番号5-A)

事業名	「うまいものブランド」を活用した商品販売及び開発事業		
概要	日本遺産のまちをPRするために「うまいものブランド」の観光PRへの活用とともに、日本遺産ブランドを生かした新商品の開発を進める。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	日本遺産ブランド新商品開発事業	日本遺産のストーリーを生かした新商品を市内事業者主導で開発し、うまいものセレクトの商品化及び文化財還元制度を推進する。	うまいもの遺産創造委員会
②	うまいものセレクトを活用した市内外における観光PR及び物販	日本遺産の観光PRや文化財イベントの実施、浮世絵刷り体験キットや納め太刀のレプリカを活用した大山詣り体験コーナー、うまいものセレクトの物販販売により、日本遺産のPRを推進する。	伊勢原市日本遺産協議会 伊勢原市観光協会
③	MICE、ユニークベニユーの造成	インバウンド需要の回復を見据えて、既存の体験コンテンツやサブストーリーの新規コンテンツを活用して、民間事業者のツアー創出の支援を行う。	伊勢原市日本遺産協議会
④			
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	日本遺産関連で開発された商品・サービス数 地元業者による日本遺産関連商品作成数		13商品
2020年			15商品
2021年			17商品
2022年	商品の新規開発 1件		18商品
2023年	商品の新規開発 1件		19商品
2024年	商品の新規開発 1件		20商品
事業費	2022年： 250万円 2023年： 250万円 2024年：250万円		
継続に向けた事業設計	「うまいものセレクト」ブランドの魅力を高めるために新商品の開発や積極的な物販販売を行う。販売収入還元制度のPRを合わせて行うことで、商品の付加価値を高め、更なる開発に繋げていく。		

(7) - 6 普及啓発

(事業番号6-A)

事業名	文化財を次世代に繋ぐ体験事業		
概要	日本遺産のメインストーリーを体験出来る教育旅行プログラムを創出し、日本遺産の普及啓発、周知PRを実施する。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	宿坊体験型教育旅行誘致事業	関東を目的地とした東北地区、東海地区からの教育旅行をターゲットとして、継続した教育旅行誘致を実施する。	伊勢原市日本遺産協議会
②	宿坊体験型教育旅行受入事業	教育旅行の関係者との調整を行い、受け入れ体制を整える。合わせて、地元関係者と連携して新たな体験メニューなどの創出を行う。	伊勢原市観光協会
③	サブストーリーを活用した体験コンテンツの追加	サブストーリーの整理を行い、体験コンテンツを造成し教育旅行に活用することで、エリア周遊を促す。	伊勢原市日本遺産協議会
④			
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	各年度の宿坊体験型教育旅行の学校受入れ校数		0校
2020年			2校
2021年			4校
2022年	教育旅行の学校受入れ校数		4校
2023年	教育旅行の学校受入れ校数		5校
2024年	教育旅行の学校受入れ校数		6校
事業費	2022年：150万円 2023年：100万円 2024年：100万円		
継続に向けた事業設計	宿坊体験型教育旅行は、伊勢原市観光協会と大山先導師会旅館組合が中心になって、継続した事業実施を進めている。		

(7) - 6 普及啓発

(事業番号6-B)

事業名	文化財を活用した普及啓発事業		
概要	構成文化財の調査結果などをいかして、市民への普及啓発事業を実施する。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	構成文化財の調査研究	構成文化財の一つである「宿坊」の重要な建造物や「大山能」の能面や装束の調査を進め、文化財登録を目指す。	伊勢原市
②	大山能親子教室	構成文化財の「大山能」の次世代への継承を目的に、幼稚園児から中学生を対象とした謡や仕舞を学ぶ講座を実施する。	伊勢原市 大山阿夫利神社
③	構成文化財を活用した展示会	文化財の調査結果を活用し、日本遺産ストーリーの普及啓発のために公民館や構成文化財内での展示を実施する。	伊勢原市 構成文化財所有者
④			
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年			5名
2020年	大山能親子教室への参加者数		中止
2021年			6名
2022年	大山能親子教室への参加者数		15名
2023年	大山能親子教室への参加者数		20名
2024年	大山能親子教室への参加者数		25名
事業費	2022年：40万円 2023年：40万円 2024年：40万円		
継続に向けた事業設計	構成文化財である「大山能」の装束や能面の文化財登録を進めることで、文化的価値を高め、大山能教室への参加者の増加に繋げ、次世代に継承することで、保存と継承の循環を目指す。		

(7) - 7 情報編集・発信

(事業番号7-A)

事業名	情報発信 PR 事業		
概要	市の HP や SNS を活用して新たな情報発信を進めるとともに、観光 PR や文化財イベントなどで、日本遺産の PR を進める。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	日本遺産サブストーリー紹介の取組	比々多エリア、日向エリアの構成文化財や、無形文化財のサブストーリーの整理を行い、WEB ページでの解説を行うとともに、体験コンテンツの紹介や案内を行う。	伊勢原市日本遺産協議会
②	日本遺産周知物品の新規作製及び更新の取組	本日本遺産の PR で活用している「ミニ納め太刀」や「布招き」、「パンフレット」などの周知物品の時点修正などを検討し、更新を行う。また、合わせてサブストーリーの体験コンテンツに活用する物品の作成を検討する。	伊勢原市観光協会 伊勢原市日本遺産協議会
③	デジタル博物館の創設に向けた検討	調査した文化財を生かして、デジタルモデルの検討を進め、いせはら文化財サイトでの新規コンテンツの作成を目指す。	伊勢原市
④	外国人向け WEB ページの拡充	外国人向けの情報発信として、令和3年11月に解説した英語版いせはら文化財サイトのコンテンツを追加し利便性の向上を図る。	伊勢原市
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	いせはら文化財サイトのページビュー数		97,244 ページビュー
2020年			92,750 ページビュー
2021年			100,348 ページビュー
2022年	サブストーリーの紹介よるページビュー数の増		105,000 ページビュー
2023年	サブストーリーの体験コンテンツの紹介によるページビュー数の増		110,000 ページビュー
2024年	デジタル博物館の創設によるページビュー数の増		115,000 ページビュー
事業費	2022年：25万円	2023年：25万円	2024年：25万円
継続に向けた事業設計	情報発信については、HP や SNS は伊勢原市の発信を活用するなど協議会と市が連携して、事業実施を進める。また、観光の入口となる観光協会や各構成文化財の WEB ページとも相互に連携する。		